

長野県松本市

OHKUBOHARA

大久保原遺跡Ⅰ

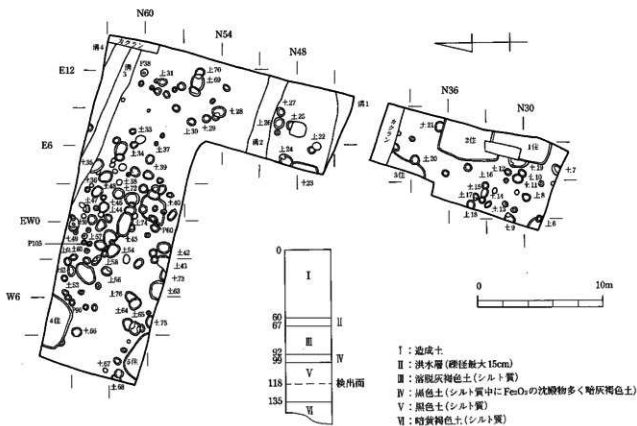
—緊急発掘調査報告書—

2001.10

松本市教育委員会

例言

- 1 本書は、平成13年4月16日～5月18日に実施された松本市笹貫に所在する大久保原遺跡第1次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は帝國石油株式会社による天然ガスパイプライン関連施設建設事業に伴う緊急発掘調査であり、同社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、Ⅰ：事務局、Ⅱ-1：森義直、その他を田多井用章が行った。
- 4 本書作成に当たっての作業分組は以下の通りである。
遺物洗浄・遺構図整理：菊池直哉
遺物実測：竹平悦子、田多井用章
版組・トレース：菊池直哉、田多井用章
編集：田多井用章
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。
竅穴住居址→住、上坑→土、ピット→P
- 6 図中で用いた方位記号は全て磁北を用いている。
- 7 調査実施及び本報告書作成にあたり、以下の方々から協力・教示を得た。記して感謝申し上げる。
カワイ精密機械金属株式会社、森義直（五十音順、敬称略）
- 8 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。



第1図 調査区遺構配置図・基本土層柱状図

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

大久保原遺跡は、松本市街地の南西、笹賀地区に位置する遺跡である。現在は昭和46～47年に造成された大久保工場公園団地とその周辺に位置する。これまで発掘調査が実施されたことはなく、開発行為に伴う試掘調査・立ち会い調査が何度か実施されたものの、遺構・遺物とも確認することができなかった。わずかに工場公園団地造成時に縄文時代に帰属すると思われる打製石斧が採集されているのみで、遺跡の実態は不明であった。そうした中、この地に帝国石油株式会社による天然ガスパイプライン関連施設建設事業が計画され、事業地が周知の遺跡である大久保原遺跡の範囲に近接しており、埋蔵文化財を包蔵する可能性があった。このため事業者と埋蔵文化財の保護について協議を行い、試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することとし、その結果を踏まえ再度協議を行うこととなった。

試掘調査は松本市教育委員会により実施され、時期不明ながら住居址・土坑と思われる遺構が確認され、事業予定地内の一部にまで大久保原遺跡が広がっていることが判明した。この結果を踏まえ、再度遺跡の保護協議を行い、天然ガスパイプライン関連施設建設により埋蔵文化財が破壊される範囲について発掘調査を行って遺跡の記録保存を図ることとなった。発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、事業者である帝国石油株式会社と松本市の間に平成13年3月29日付けで発掘調査業務の委託契約が締結された。現地での発掘調査は平成13年4月16日から同年5月18日まで実施された。発掘調査終了後は、引き続き考古博物館において、整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

調査団長	竹瀬公章(松本市教育長)
調査担当者	田多井用章(文化課主事)、菊池直哉(同嘱託)
調査員	今村克、森義直
協力者	浅輪敬二、今井太成、上條道代、小松正子、中村安雄、丸山恵子、百瀬二三子
事務局	松本市教育委員会教育部文化課 有賀 誠(課長)、備谷康治(課長補佐)、松井敦治(同)、直井雅尚(主査)、武井義正(主任)、 久保田剛(同)、渡邊陽子(嘱託)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

本、大久保原遺跡は松本市の南西部で、鎮川が奈良井川と合流する合流点の約800m上流の右岸にある。標高は605m前後で流路は蛇行し鎮川の旧氾濫原となっており、現在は堤防によって守られている。

松本盆地は断層による構造盆地で、盆地を埋める堆積物は梓川・奈良井川それに北からの高瀬川から運ばれた砂礫が主体をなしているが、それに多くの河川や沢による堆積物が加わって現在の松本平が形成され、その一環として、本遺跡付近の奈良井川系の堆積物に鎮川の堆積物が加わって現地形が形成されている。

この遺跡に直接関係ある鎮川についてみると、本遺跡の南西の鉢盛山東部に源を發し、朝日村で中俣沢・カシ沢を合して中・古生層を侵食しながら東北進する。朝日村針尾付近で盆地に流出し、この針尾付近を扇頂とする鎮川扇状地を形成している。この鎮川扇状地は河川の回春により、川の兩岸に三段の段丘が確認されている。右岸には第三段の今井面形成以後も二、三の並段丘がみられるが、今井面の一部と考えられるので、この今井面は本遺跡付近で沖積層に漸移し終わっている。鎮川扇状地の西側は梓川扇状地に、また、東側は奈良井川系の扇状地に連なって合成扇状地を形成しつつ末端は、南栗から本遺跡付近の標高600m前後のところで沖積地に漸移している。即ち、本遺跡は合成扇状地の扇頂と、沖積地の境界付近の混成堆積物上とみられるが、少なくとも地表付近は、混成堆積物から洗い出されたシルト質となっている。

鎮川の特徴

この河川は上流は急流で侵食力は非常に大であるが、盆地に流入すると急に流速が衰え、運搬される礫の体積は流速の6乗に比例するため、土砂を一気に堆積させ、河床の傾斜はますます緩くなり、北荒井付近から本遺跡を通り奈良井川との合流点までの、約270mほどは流路を選んで蛇行している。さらに、この河川は朝日村付近で一部伏流水となるため、河況係数が非常に大で出水時には氾濫付近で、しばしば冠水（小洪水）のあったことが土層から明らかである。

遺跡付近の地質

この付近の主体をなす堆積物は、上述した如く奈良井川系の堆積物であるが、上層になるにつれ鎮川との合成扇状地堆積物となり、表上近くは鎮川による堆積物が主体となっている。両河川共中・古生層を侵食して東流する河川であるため、堆積物だけからは、いずれの河川のものか区別することはわずかしく、地形的な考察が必要である。

土質は中・古生層からの砂岩、粘板岩、チャートと主体とする砂礫とその風化物と、一緒に運ばれたローム質の混入した合成扇状地の土層が堆積し、その後の雨水や小流の働きで、それらの堆積物から洗い出されたシルト質土が、本遺跡付近を覆っている。このシルト質の上層中にみられる礫層は、前述の洪水によるものであるが、礫質は同じでも表面が褐色を帯びた礫と奇麗な礫が混在している。これは洪水時、段丘面上にあった礫を河川中の礫と一緒に押し流してきたことを物語っており、礫径からして縄紋頃からたいした洪水は起きていない。

検出面上の黒色土中に縄紋の生活面があり、このシルト質のつやのない黒色土が生じたのは、落葉広葉樹林（主にコナラ）によって生じた腐食酸によるものと推定される。

発掘地点は第1図の土層柱状図に見る如く、縄紋以前からの土層が大きくかく乱されることがなく残っているということは、西隣りの梓川水系のように激しい流路の首振りになかったことを物語っている。

遺跡中の溝について

本遺跡の発掘地点には、N65°WからN70°W方向の溝が4本見つかっており、これらはいずれも縄紋の黒色土帯を切っているため縄紋以後の新しいものであるが、上部は整地されているため時代は不明である。

溝の性質は保存のよい溝2についてみると、第5図の如く下部に暗灰褐色砂土が沈殿しており、途中灰白色の厚さ2cm程の砂層が1層あるのみで、他は色の違いはあるものの全てシルト質であり、礫を全く含んでいない。溝の壁は薄黒くボケている。このことから溝の壁には草が茂り、流れは極めて緩やかであり、 Fe_2O_3 の薄い沈殿層が幾重にも存在していることから、何年もかかって埋没していったことを示している。

2. 歴史的環境

大久保原遺跡は、松本市街地の南西、笹賀地区に位置する。大久保工場公園閉地造成時に縄文時代の遺物が出土したことから遺跡の存在が明らかになったもので、これまで発掘調査が行われたことはなかった。また、遺跡内の開発行為に伴って立ち会い調査・試掘調査を何回か実施したが、遺構・遺物が確認されたことはなく、遺跡の実態が不明であった。

大久保原遺跡周辺の遺跡の分布状況は第2図のとおりである。これらのうち、奈良井川左岸の遺跡は、鎮川によって南北に分断された奈良井川の扇状地上に位置する。これらの遺跡ではこれまで開発行為に伴う発掘調査が実施されており、ほ場整備事業及び中央自動車道長野線の築造に先立つ発掘調査により古代の大規模な集落が存在していたことが明らかとなっている。

奈良井川左岸の遺跡の起源は縄文時代中期にさかのぼることができる。奈良井川左岸に形成された微高地上に集落が展開していたものと思われ、神戸・上二子・中二子・下神・梶海波・南栗・北栗の各遺跡では遺構・遺物が確認されている。いずれの遺跡でも遺構・遺物とも散発的であり、継続的な集落が営まれたものとは考えにくい。縄文時代にはこの微高地は未だ不安定離水城であり、奈良井川及び鎮川の洪水等の影響を受けていた地域であったためと思われる。今回の調査地点でも、縄文時代後期一晩期にかけての遺構・遺物が確認できたものの、共に散発的であり、時期的にも断絶が見られ、周辺の遺跡と同様の傾向を示している。弥生・古墳時代の様相ははっきりとせず、いくつかの遺跡で少量の遺物が確認されているのみである。

古代になり、この一帯に安定した離水城が形成されるようになると、奈良井川東岸の地域から開発の手が及び、計画的かつ大規模な集落が形成されたことが、下神・南栗・北栗・三の宮遺跡の調査成果から明らかになっている。こうした大規模な集落は8世紀前半から形成され、9世紀代にかけて継続する。とりわけ下神遺跡は草茂の庄に比定される集落である。しかしながら、10世紀になるとこれらの集落は急速に衰え、下神遺跡では9世紀末には集落が廃絶してしまい、わずかに北栗遺跡・南栗遺跡で小規模な集落が営まれるのみとなる。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

今回の調査地点は、松本市笹賀5,652-240に位置する。現在は大久保工場公園閉地の北端にあたり、すぐ北側を鎮川が東流している。標高は605m前後である。今回の調査は、事前に行われた試掘調査の結果を踏まえ、遺跡が残存しており、開発行為により遺跡が破壊される範囲を対象として行った。

調査にあたっては、重機により遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により検出・遺構掘り下げを行った。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。

調査区の基本的な土層構成は第1図の通りである。試掘調査の結果から、遺構掘り込み面は縄文時代の包舎層である第Ⅴ層中にあり、遺構はその下の第Ⅵ層をそれほど深く掘り込んでいないと考えられたため、検出面は第Ⅴ層中とした。このため、検出時には遺構プランはそれほど明確ではなかった。

調査により、縄文時代後期前葉から晩期中葉の遺物が出土し、住居址・溝・土坑・ピットを確認できた。し

かし、遺構はいずれも立ち上がり・平面形が必ずしも明確ではなく、遺物の出土量も少なかった。なお、調査地点に近接する南栗遺跡・下神遺跡の調査成果から第Ⅴ層の上層に古代以降の遺構面がある可能性が考えられた。しかし、第Ⅴ層より上は工場公園造成時あるいはそれ以前の耕作によるものと思われる削平を受けていた。このため、古代の集落が今回の調査地点にまで広がっているかは残念ながら確認できなかった。なお、調査終了後、土層堆積を確認するためのトレンチを掘削したが、Ⅵ層の下層には暗褐色土の堆積が確認できた。トレンチ内ではこの暗褐色土層中からは遺構・遺物とも確認されず、この面での調査は実施しなかった。このため詳細は不明だが、南栗遺跡の調査所見では縄文時代後期の遺構面の下層に縄文時代中期の遺構面が存在していたことが明らかにされており、今回の調査地点も同様であった可能性も考えられる。

調査の実施期間・面積・検出遺構・出土遺物の概要は下記のとおりである。

調査期間	平成13年4月16日～5月18日	
調査面積	293㎡	
検出遺構	竪穴住居址	5棟
	溝	4条
	土坑	54基
	ピット	84基
出土遺物	土器（縄文土器）・石器	

Ⅳ 遺 構

今回の調査により、縄文時代に帰属するものと思われる竪穴住居址・土坑・ピット及び時期不明の溝を確認した。前述のように、縄文時代の遺構については、立ち上がり及び面的な広がりが必要しも明瞭に確認できたわけではなく、本来は包含層中の落ち込み等であった可能性も否定できない。

1. 竪穴住居址

6棟を調査したが、立上りの有無・遺物の出土量等から第6号住居址を欠番扱いとした。残りの5棟についても、立上りは土層断面で確認できたものの、遺物の出土量も限られており、炉や柱穴など住居址に付随すべき遺構についても不明であり、明確に住居址として把握はできなかった。

第1号住居址

調査区南端に位置する。検出面の第Ⅴ層より若干茶色みの強い土層のまとまりを拾った。覆土は2層からなり、暗黄褐色土を床面とした。規模は474×〈191〉×31（長軸×短軸×深さ、単位はcm、〈〉内は現存長、以下同じ）、主軸方向はN-15°-E。床面でピットを5個確認できたが、柱穴は不明。炉は確認できなかった。遺物は土器が少量出土したが、いずれも小片で時期は不明。

第2号住居址

調査区南端に位置し、第1号住居跡に切られる。覆土は単層で、暗黄褐色土を床面とした。規模は500×〈282〉×20、主軸方向はN-14°-E。床面でピットを2基確認した。図示できた遺物として第8図18がある。縄文時代後期に帰属するものか。

第3号住居址

調査区南側に位置する。大半が調査区外にかかり、北側は攪乱に切られる。覆土は2層からなり、暗黄褐

色土を床とした。規模は〈317〉×〈125〉×19、主軸方向はN-32°-E。床面でピット等は確認されなかった。遺物はほとんど出土しておらず、明確な時期は不明。

第4号住居跡

調査区西端に位置する。覆土は2層からなり、壁は斜に立ち上がる。黄褐色土を床面とした。規模は〈351〉×〈151〉×15、主軸方向はN-32°-E。床面でピットを1基確認したが、柱穴及び炉は不明。遺物は他の住居跡より多く出土したものの、300g程度とそれほど多くはない。いずれも縄文土器で、図示できたものとして第8図15がある。出土土器から縄文時代後期に帰属するものと思われる。

第5号住居跡

調査区北西端に位置する。覆土は3層からなり、壁は斜に立ち上がる。黄褐色土を床面とした。規模は398×〈204〉×18。床面でピットを1基確認したが、柱穴及び炉は不明。遺物は240g出土したのみで、図示できた遺物として第8図2・11がある。出土土器から縄文時代後期に帰属するものであろう。

2. 溝 址

今回の調査では4条の溝址を確認した。いずれの溝址も一部を掘削したのみで、全体を掘りきってはいない。上層が削平されているため、掘り込み面は不明である。縄文時代後期の包含層を切っていることから、これよりは新しいが、4条とも出土遺物は皆無に等しく、明確な帰属時期は不明である。断面はいずれもV字またはU字に近い形状をしており、人工的に構築されたものであるが、その性格は明らかではない。覆土下部には砂層もしくは砂質土層の堆積が見られ、かなり緩やかな水の流れがあったものと考えられる。規模と主軸方向は、第1号溝址が現存幅130cm、深さ69cm、主軸方向はN-74°-W、第2号溝址が幅140～180cm前後、深さ91cm、主軸方向はN-71°-W、第3号溝址が幅80～120cm前後、深さ62cm、主軸方向はN-66°-W、第4号溝址が現存幅86cm、深さ54cm、主軸方向N-63°-Wである。南側の溝1・2、北側の溝3・4がそれぞれ主軸方向がほぼ同じである点が注目される。

3. 土坑・ピット

遺構検出時に、直径がおおよそ50cm以上のものを土坑、それ以下のものをピットとして扱った。土坑を54基、ピットを84基確認することができた。形状は楕円形のもの为主体となり、多くは黄褐色土層まで掘り込んでいる。掘削時に各々の立ち上がりを断面で確認していないので、本来は遺構でないものもある可能性がある。少量ながら縄文土器の出土しているものが多く、出土遺物を図示できたものとして土35・42・43・47・55・59・74、P38・60・90・105がある。帰属時期は明確ではないが、縄文時代後期から晩期の間に位置づけられよう。

V 遺 物

今回の調査により、縄文土器・土製品及び石器が出土した。量的にはそれほど多くない。なお、石器は素材剥片であったため、今回は掲載を見送った。第8図が出土した縄文土器で、後期前葉から晩期中葉にわたるが、時期的な断絶が認められる。

1は深鉢の口縁部で、波状口縁となる。波頂部は肥厚し、縦の3条の沈線が施文される。波頂部間は1条の沈線が施文され、その下の屈曲部には刻みが施文される。口縁部下には縦の沈線が残存している(図中▲)。

堀之内1式。2は内外とも「冴なナデ調整。上端に沈線が残る。3～5は直線的な区画による磨消縄文が施文される。4・5は同一個体で、4には上端に半沈線が施文されている。文様の全容は明らかではないが、堀之内2式の深鉢になるものか。6は無文の浅鉢。内外面ともナデ調整で、口縁部はやや尖り気味になる。7は体部下半で屈曲して開き、口縁部が内屈する深鉢。胴部の屈曲部に2条の沈線とLR縄文が、屈曲部から上に横位の羽状沈線文が施文される。口縁部には2条の沈線とLR縄文が施文され、粘土層が貼付される。曾谷式あるいは高井東式に並行するもの。8は2条の平行沈線の間にLR縄文が施文される。小片のため詳細が不明だが、屈曲する鉢の屈曲部か。9・10は同一個体の可能性が高く、ともに赤褐色を呈し、丁寧なミガキ調整。壺に近い形態になるものか。磨消縄文による文様の全容がわからないが、10は上下に対向する二又文によりX字状の縄文帯が形作られる。佐野Ⅱ式あるいはこれに並行する時期のものか。11は深鉢で、上端に沈線が残る。外面はナデ、内面はケズリ調整。12～16は口縁部の内湾する無文の深鉢で、小波状をなすもの(12)もある。外面はナデ、内面はケズリ調整。明確な帰属時期はわからないが、後期から晩期にかけて一般的にみられる器種である。

17～19は上製円盤。いずれも側縁は研磨されている。18は実測図左下の部分に穿孔があるが、土製円盤製作時のものかは不明。いずれも歯状工具による条線が施文されており、堀之内1式に帰属するものであろう。

VI 調査のまとめ

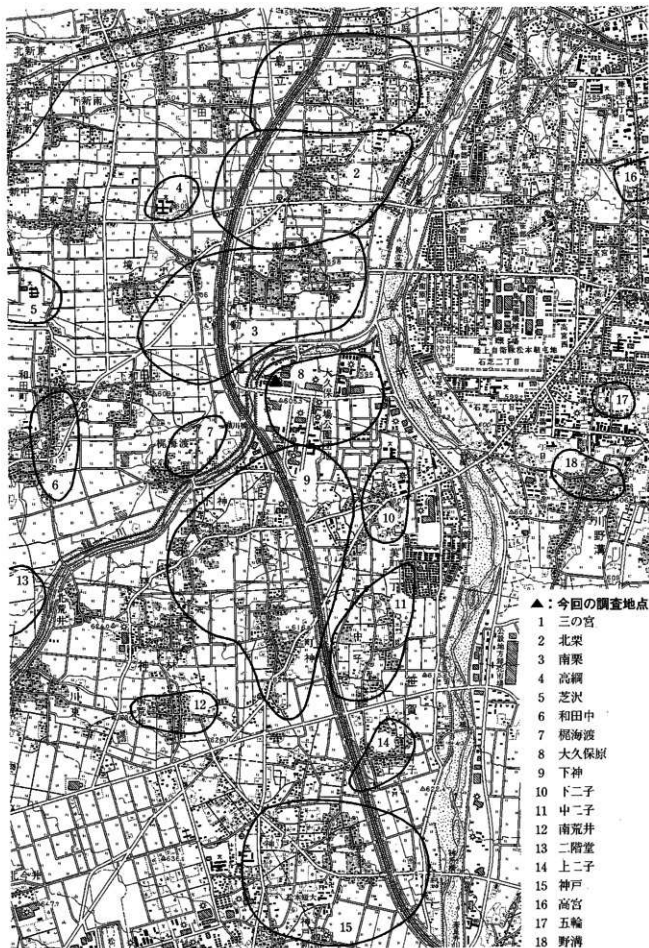
これまで述べてきたように、今回の調査地点から縄文時代後期～晩期の遺構・遺物を確認することができた。周辺の南栗・北栗遺跡などと同様、遺構の様相ははっきりとせず、また遺物の量もそれほど多くはない。また、時期的にも断絶が認められ、継続的な集落が長期間営まれたものとは考えにくい。奈良井川及び鏡川に挟まれた不安定離水域にあり、洪水等河川の影響を受けやすい立地条件を反映したものとしよう。

今回の調査は大久保原遺跡では初めてのものとなったが、これまで実態が全く不明であった本遺跡の内容の一端を明らかにできた点にまず大きな成果を認めることができる。また、調査によって明らかにされた遺構・遺物のあり方は近在の遺跡におけるこれまでの発掘調査成果を追認する内容のもので、奈良井川左岸の縄文時代集落の展開の様相を考える上でも一定の成果を挙げる事ができたといえよう。

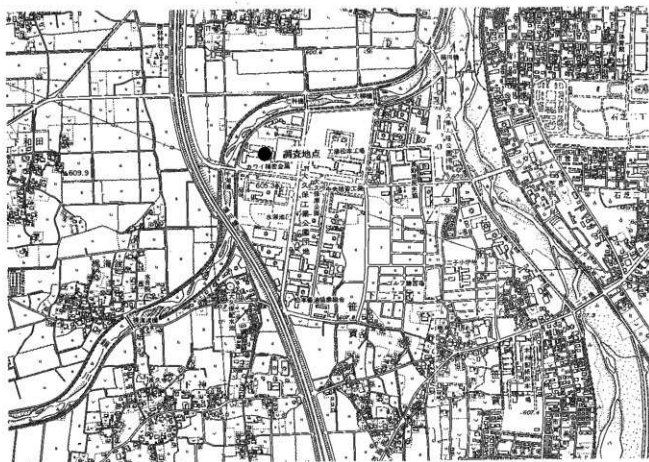
最後となったが、調査実施にあたり多大なるご理解とご協力をいただいた帝国石油株式会社並びにカワイ精密機械金属株式会社の関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

参考文献

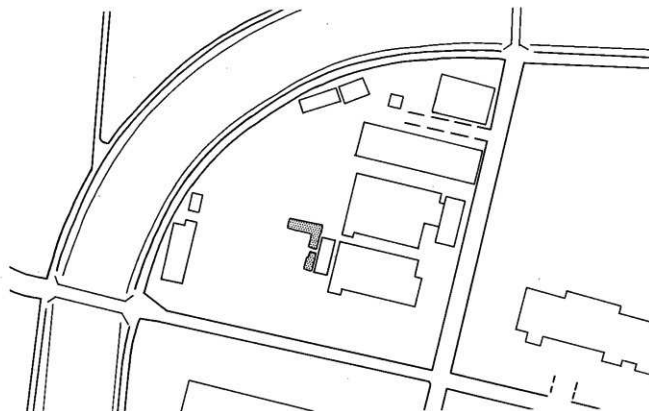
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内 その1—総論編」
 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6—松本市内 その3—下神遺跡」
 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7—松本市内 その4—南栗遺跡」
 松本市教育委員会 1985「松本市局立南栗・北栗遺跡・高綱中学校遺跡、条里的遺構」
 2000「芝沢遺跡Ⅰ・Ⅱ、南栗遺跡Ⅳ・Ⅴ緊急発掘調査報告書」
 白瀬 長秀 1999「離山遺跡羽状沈線文の編年観」『長野県考古学会誌』90号



第2図 大久保原遺跡と周辺の遺跡 (1:25000)

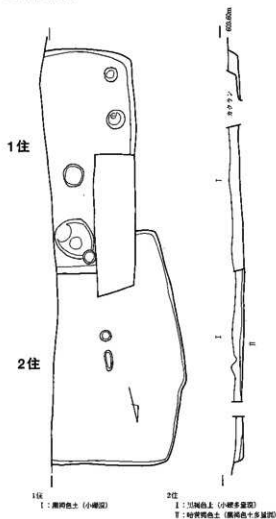


第3図 調査地点位置図 (1 : 15000)

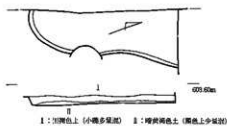


第4図 調査地区配置図 (1 : 300)

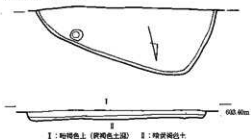
第1·2号住居址



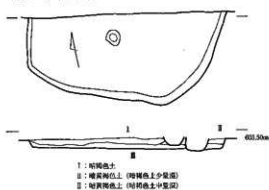
第3号住居址



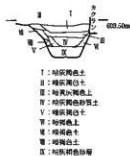
第4号住居址



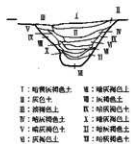
第5号住居址



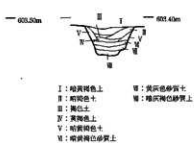
溝1



溝2



溝3



溝4



土6



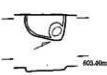
土7



土8



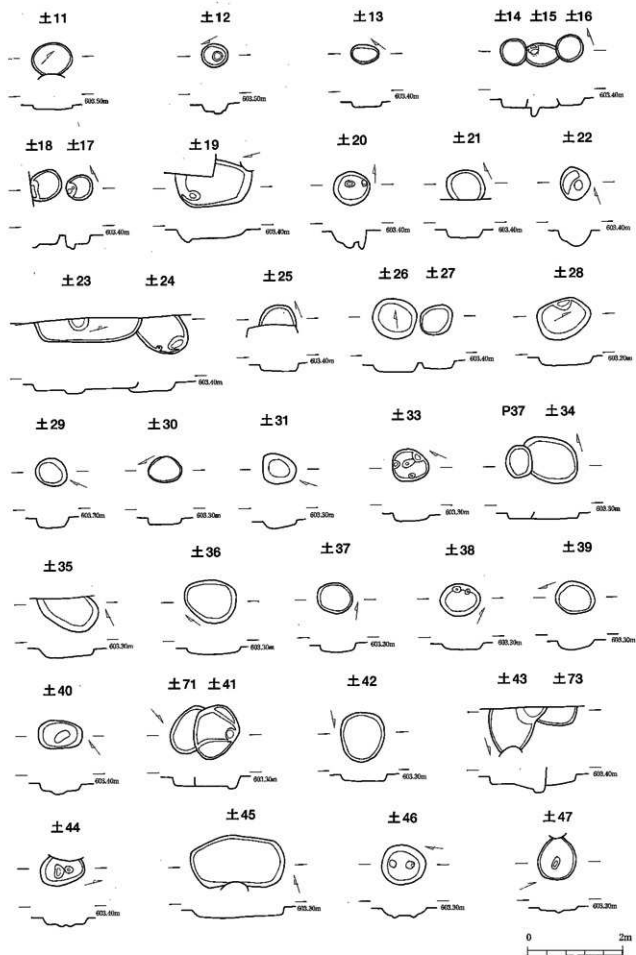
土9



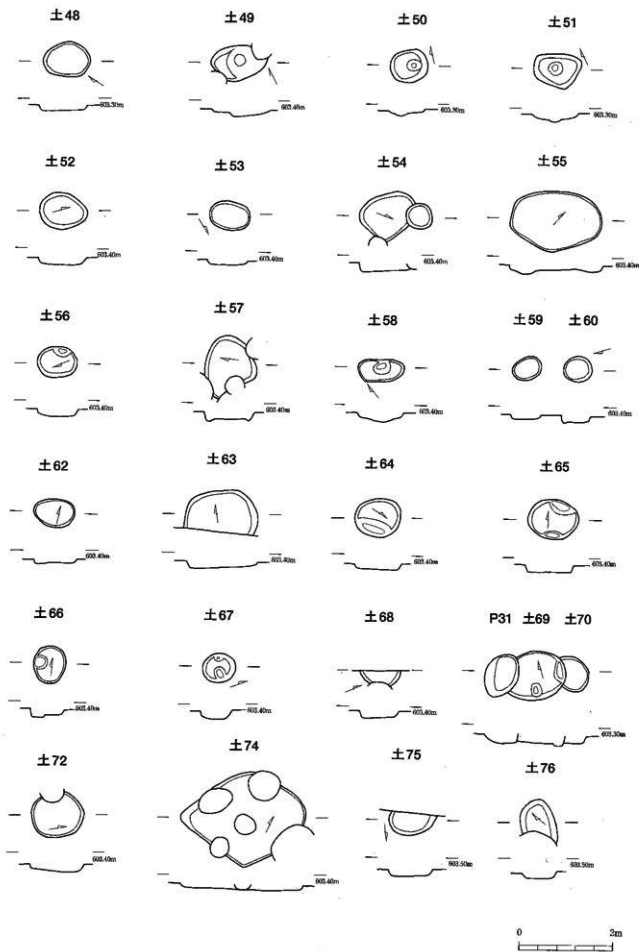
土10



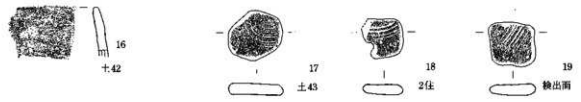
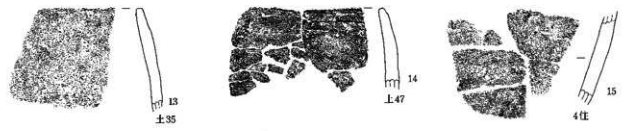
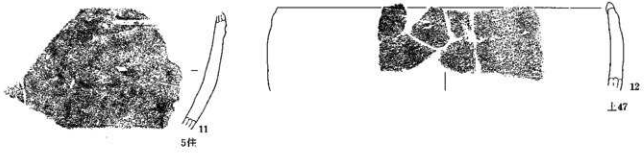
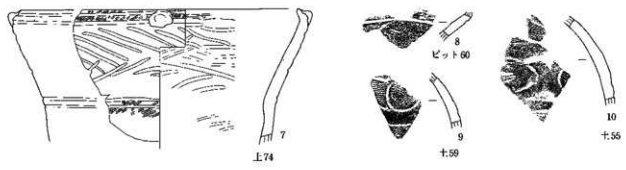
第5图 住居址・溝址・土坑 (1)



第6图 土坑 (2)



第7圖 土坑 (3)



第8図 出土土器・土製品



調査区全景（北西から）



調査区南側（南から）



調査区北側（北から）



5住完掘（南から）



溝1断面



溝3断面



溝4断面



作業風景

大久保原遺跡Ⅰ緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしおおくぼばらいせききんきゅうはくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市大久保原遺跡Ⅰ緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.155							
編著者名	田多井用章 森義直							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710)							
発行年月日	平成13年(2001)年10月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード				調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
おおくぼばらいせき 大久保原	ながのけん 長野県 まつもとし 松本市 きさきが 並賣	20202	304	36度 12分 20秒	137度 56分 10秒	20010416 ～20010518	293	天然ガスパイプライン 関連施設建設に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大久保原	集落址	縄文	竪穴住居址 溝 土坑 ピット		5棟 1条 54基 84基 土器 (縄文土器) 石器		縄文時代後期前葉から晩 期中葉の集落址を確認	

松本市文化財調査報告No.155

長野県松本市

大久保原遺跡Ⅰ

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成13年10月31日
 発行者 松本市教育委員会
 〒390-0873
 長野県松本市丸の内3番7号
 印刷 株式会社 綜合印刷